2019 年度 新潟大学創生学部 学生国際交流の取り組み

――授業「地域・国際交流 B」の到達点と課題――

渡邊　洋子（新潟大学）

本稿は、新潟大学創生学部の選択科目「地域・国際交流 B」における学生主体の国際交流活動の実践報告である。同授業の趣旨と位置づけ、事前準備から現地交流活動の実際に至るプロセス、授業担当者としての振り返りに加え、当事者の学生自身による振り返りを含む、実践報告である。

キーワード：国際交流、学生主体授業、国際／異文化理解

はじめに

本稿は、2019 年度に新潟大学創生学部の授業で実施した学生主体の国際交流事業の経過と成果の概要を、授業担当者の立場から報告するものである。この訪中では、事前準備、現地訪問と交流活動の企画立案および実施・運営、帰国後の報告書の企画・編集作業などが、すべて受講学生の手によって担われた。また、創生学部（2017 年 4 月設立）の学部名を付した初の国際交流事業であったことも、特筆される。

同授業は、2019 年度創生学部の選択科目「地域・国際交流 B」の一環として実施された国際交流の取り組みであった。本稿では、この授業における創生学部訪中団（以下、訪中団）の組織化から準備、実際の訪中日程、特に現地交流活動を跡づけ、授業担当者自身の振り返りと学生の振り返り（附録）により実践報告とする。執筆にあたり、『2019 年度新潟大学創生学部訪中団報告書』（編集：高田敦子・岡本留奈・小根澤茉莉編、発行：同報告書編集事務局（渡邊洋子）、2020 年 2 月）から適宜引用する。詳しくは同書を参照されたい。

以下、1 で本科目の位置づけと教育的意図（本科目のねらい、授業全体の概要、 教員の意図と関わり等）に言及し、2 で訪中の準備・実施・振り返りの全プロセスを跡づける。さらに 3 では、授業担当者として、若干のコメントを述べる。最後に【附録】として、同報告書に掲載された学生の最終レポートを、本人の承諾を得て転載する。

1　授業「地域・国際交流 B」の概要

本科目は、創生学部開設 3 年目にして初めて開講された選択科目である。卒業単位のフレームワークでは「自由科目」と位置づけられる。担当教員は、佐藤靖教授と渡邊の二人である。

授業「地域・国際交流 B」のねらいとしては、「学生が海外に赴いて国際交流を行うことを通じて、グローバルな視野から自ら考え行動する能力を身につけること」を掲げている。これを受けた学習の到達目標は、「1. 海外経験に関わる実践的活動を通して、国際交流・多文化理解に関わる視野を広げ、知識を深める。2. 海外経験に関わる実践的活動を通して、グローバルに活躍するための素地を形成する」である。この実践的活動には 2 つの形態を設けており、授業形態①は個人的な海外経験の振り返りと他者との共有（ワークショップ主催など）を中心とするもの（佐藤教授担当）、 授業形態②（以下、本授業）は、海外の大学等との連携により、学生が現地訪問を企画立案し、現地交流活動を自らコーディネートすることを通して、「当事者意識をもった形での世界との結びつき」の経験につなげようとする」もの（渡邊担当）である。

連携相手（カウンターパート）は、新潟大学と大学間交流協定を有する、北京師範大学珠海校である。本授業はよって、受講学生が組織した訪中グループすなわち訪中団を通して仲間と協力・ 連携しながら、事前段階から全行程、事後の振り返りに至るまで、自分たちで計画立案・企画・運営を担うことを目指した。そこで授業方針は第一に、授業形態②での履修登録者が訪中団を組織化すること、第二に、訪中団のメンバー一人ひとりが自立的に取り組み、協働できる組織を始動させ、企画・連絡調整・運営・振り返りの一連の交流活動のプロセスを主導・協働すること、第三に、活動が軌道に乗るまでは担当教員が半介入的にサポートするが、その後の活動は、原則として訪中団の自己決定・運営に任せ、教員は飽くまでもアドバイザーに留まること、とした。

今回、国際交流活動を行う相手は、北京師範大学珠海校外国語学院（外国語学部）の大学生、および同校の附属学校として発展してきた広州市南澳実験学校（小学校）であった。

北京師範大学珠海校は、新潟大学と大学間交流協定（および教育学部との学部間交流協定）を締結している。この関係により、毎年、全学枠で 5 人、教育学部枠で 5 人の学生が、留学生として来学しており、近年、この全学枠の大多数が外国語学院の学生によって占められていた。このような背景から、初の創生学部の交流は、同学院日本語専攻の学生との「日本語での交流」と決めた。

国際交流には、グローバル言語である英語や先方の言語の習得が重要であるが、実態としては「英語（相手の言語）ができないから国際交流は無理」と及び腰になり、交流の入り口にさえ立てない学生が少なくないのが実状である。ゆえに、創生学部の参加学生にまず、「国際交流は言葉以前に、お互いに知り合いたい／関わりたいという心と心の交流である」との実感をもってほしい、同時に「言葉ができたらもっと交流は楽しくなる」「語学を学んでもっと広く深く交流したい」という、内側から湧き上がるモチベーション、すなわち内発的動機を高めてほしい、との意図による。

授業の全プロセスを通して授業担当者としての筆者が担った具体的役割は、主に、1）交流先との交渉・協力依頼と事前打ち合わせ（2018 年 12 月の珠海・広州訪問）、 2）履修ガイダンス、3）事前説明会、4）メンバー決定後の第一回ミーティングの主導、5）学生主体ミーティングのモニタリングと活動のフォロー、6）主要部分に関わる訪問先の教員や責任者、関係者との連絡調整、7）以上を含む全般的状況の把握と相談役、であった。実際の訪中には、「地域・国際交流 A」（主に県内小学校で学生が多文化教育のワークショップを実践する授業）をご担当の向山恭一教授と田中一裕准教授にご参加いただき、多大なご協力を得た。両先生には、現地同行、事前準備に加え、各場面での学生への直接・間接的サポートをいただいた。

2　授業プロセスと訪中スケジュール

（1）本授業への取り組み経緯

本授業の連携先との事前打ち合わせとして、筆者は 2018 年 12 月および 2019 年 3 月に、北京師範大学珠海分校外語学院・教育学院、および広州南澳実験学校を訪問し、学生交流活動、および児童との交流活動の打ち合わせと確認などを行っている。この授業の趣旨にかんがみ、教員としては、大まかなスケジュールと交流のコンセプトのみを先方と話し合い、合意するに留めた。具体的内容については、学生の意向と決定を踏まえ、学生代表（必要に応じて教員）が、先方の大学生や実験学校長と交渉することとした。

授業の具体的な段取りとスケジュールは、以下のようなものである。

まず、2019 年 4 月には、年度当初のガイダンスで、授業担当者（筆者）が、本授業の趣旨と内容に関わる説明と質疑応答を行った。また履修登録に伴う参加メンバーの確定と顔合わせを経て、訪中団に向けたチームビルディングを開始した。この時点で、履修メンバーは 3 年生 4 人、2 年生 3 人の計 7 人であり、全員が女子学生であった。また全体スケジュールを確認し、訪中団の旅程、および交流活動の企画・運営について検討するため、必要な役割と分担を決定し、情報収集などを始めている。

創生学部は、領域科目の違いなどで、学生同士の空き時間が合いにくいため、学生の準備ミーティングは通常、昼休みに実施されることになった。また出国までは SNS の一つ、LINE が情報共有手段となった。代表や会計、交流などの担当者をはじめ、各種の役割や作業分担も徐々に決まり、紆余曲折がありつつも、準備活動は進んでいった。毎週のミーティングには、9 月から珠海校に留学予定の 2 年生の立川みなみさんがオブザーバーとして参加した。

訪中グループは 5 月に、新潟大学グローバル教育センターに在学中の北京師範大学珠海校外語学院日本語専攻の留学生ら 5 人を招き、交流ランチ会を 2 回、企画・実施した。テイクアウトのオードブルや生協のサンドイッチセットなど、学生なりの工夫を凝らしたランチ会が好印象であった。小グループに分かれてテーブルごとにおしゃべりする中で、現地交流の相手となる大学生たちと事前に親交を深めることができ、また、訪中に向けた疑問点などを相談し、自らサポートを得ることができるようになった。この間、外語学院の教員の声かけで、日本語専攻の学生との wechat（中国を中心とする SNS）グループが組織され、教員 3 人を含む計 30 人が登録して、日中学生が日本語・英語・中国語でやり取りできるコミュニティが形成された。

6 月には、訪中団の担当ごとの活動が本格的に始動している。訪中時の学校以外の訪問先（文化施設など）や現地の交通手段や文化施設などについて情報収集を行い、方向性を決めていった。また大学と実験学校の具体的な交流活動の中身も、担当が案を検討し、ミー

ティングや LINE 上で決めていった。その傍らで会計が予算案を作成し、航空チケットや現地高速鉄道などの手配は、生協や珠海校の方々のサポートにより、完了した。

7 月には、訪中への準備活動は加速化した。大学主催の危機管理オリエンテーションへの参加、珠海校・実験学校との交流内容の具体的検討、夏に帰国予定の珠海校の留学生との送別会、保険関係の手続き、最終的な渡航スケジュールの確定など、役割分担に沿って積極的な活動が展開していた。同時点で 3 年生 1 名の個人的事情での不参加が判明したが、1 年生 2 名の参加希望があり、計 8 名として再出発することとなった。

8 月には、交通手段の手配は完了し、学生交流（テーマ「日本の地域ごとの食文化」）と実験学校での交流プレゼン（テーマ「日本と中国のマナーなどの違い」）の内容が最終決定された。同時に、中国への持参資料（『訪中のしおり』）が作成され、担当ごとの準備、共通経費の徴収などが各々、取り組まれた。

9 月の最終段階には、全員での旅程シミュレーション、交流活動の具体的リハーサル、先方のお土産の用意、担当ごとの準備などが行われている。

(2) 訪中日程、参加者および交流内容

以上を踏まえて実施された実際の訪中日程と参加者は、表 1・表 2 の通りである。

現地出迎え

手作りプラカード

【表１　訪中団　全体日程表】　　2019 年 9 月 19 日（木）～24 日（火）

日付	時間	行程	備考
9/19 （木） 前泊	17:30 19:55 21:00	新潟空港集合 ANA1812　新潟空港発 名古屋（中部）空港着 名古屋　前泊	新潟駅発シャトルバス 東横 INN 中部国際空港 2
9/20 （金） 1 日目	6:00 6:30 9:40 13:00	ホテル発 空港セントレア到着 ANA875 名古屋（中部）空港発 香港空港着 シャトルバス B4（バス停）―港珠澳大橋：6HKD 橋―珠海口岸：65HKD タクシー（BNU 手配） 珠海口岸―大学（到着 16:00 頃） 夕食　珠海校との学生食事会・同教員食事会	北京師範大学珠海国際交流センター
9/21 （土） 2 日目	7:00 9:00 14:00	朝食 北京師範大学珠海分校 外語学院学生との交流会（～12:00） 外語学院学生と普陀寺見学と珠海下町観光 夕食　珠海校との学生食事会・同教員食事会	北京師範大学珠海国際交流センター
9/22 （日） 3 日目	7:00 9:00 16:27 17:13	朝食 貸し切りバス 珠海市観光（～15:00 大学に戻る） タクシー（BNU 手配） 大学―唐家湾 高速鉄道 G7698 唐家湾 発 広州南 着 バス（実験学校手配） 広州南―ホテル（到着 18:00 頃） 夕食　実験学校の先生との食事会	珠海市内 1.珠海漁女像 2.圓明新园 3.飲茶 4.邸宅 広州奥園ゴルフホテル
9/23 （月） 4 日目	8:30 12:00 12:40 18:30	広州南澳実験学校見学・交流会 給食体験（～12:40） 広州観光（～16:40）→ ホテル休憩（～18:00） 夕食	南澳実験学校 広州市内 広州奥園ゴルフホテル
9/24 （火） 5 日目	8:00 10:00 10:47 14:25 20:00	集合 バス（実験学校手配）　ホテル→広州南 高速鉄道 G6503 広州南 発 香港西九龍 着 エクスプレス 香港西九龍―香港空港 ANA860　香港空港 発 羽田空港 着	

＊学生作成の図表（『最終報告書』）を一部、渡邊が改訂

表 2　参加者（敬称略）

学年	名前	主な役割
3年	岡本留奈	団長
	小根澤茉莉	副団長、事前スケジュール管理
	高田敦子	副団長、会計
2年	内山七海	交流会企画
	大竹萌	しおり作成・編集
	堀越結衣	交流会企画
1年	島田凛々子	お土産考案
	溝井桜子	お土産考案

《同行教員》
向山恭一
田中一裕
渡邊洋子（担当教員）

以上の訪中日程の実際、学生たちの経験および振り返り内容は、【附録】に掲載する学生のレポートを参照されたい。

ここでは『報告書』から、実際の二つの交流活動についての学生の記録を引用する。

①　北京師範大学珠海校における学生交流

珠海校の一室に集合

当初の予定ではプレゼンテーションを行う予定だったが予定時刻になってもパソコンが起動しなかったため最初にアイスブレイクを行う。／中国の学生と日本の学生の合同のチームを４つ作り、それぞれコミュニケーションをとった。／ゲームは盛り上がり、次の活動で発言しやすい空気ができた。

10：15〜11：00　〈プレゼンテーション〉

日本の地方ごとの気候と食文化についての発表。中国の学生全員がしっかりと話を聞いていた。／また自己紹介の時は、拙い中国語だったが頷きながら聞いてくれた。

日本の各地域の食文化をスライドで説明

11：20〜12：15　〈ワークショップ〉

グループワークの作業の説明

アイスブレイクのグループに分かれ、プレゼンの内容を踏まえ、あらかじめ用意してある料理のカードと、中国の学生がカードに書いた料理が日本のどの地方のものなのかを日本地図に貼っていくというワークショップを行った。アイスブレイクで発言しやすい空気になっていたので、それぞれのグループで中国人や日本人関係なく意見を出し合っていた。引っ掛け問題も入れたが、自分の持っている知識をふまえて考え正解した中国の学生が特に印象的だった。景品の飴は全員に配った。

日中学生が入り混じってのグループワーク

各グループで食の日本地図が完成

〈成果〉

プレゼンやワークショップを通じて、日本の食文化について、中国の学生に楽しく学んでもらえたのではないか。

また、パソコンがうまく起動しないアクシデントや、予定参加人数よりもかなり多い学生の参加など当初の予定とは異なることが起きたがその場その場で対応することができた。さらに昼食では、広東省での食事のマナーについて知ることができた。（以上、堀越結衣）

学生交流に参加した日中の学生・教員

②　広州南澳実験学校における交流事業

実験学校の校門を入った正面で、先生方とともに

8：40〜9：20　〈校内見学〉

さまざまな教室や授業風景などを見学した。

玄関ホール（全教員の写真とプロフィール）

9：25〜10：25　〈授業見学〉

英語の授業を見学した。挙手をして積極的に発言する姿がよく見られた。

10：25〜11：05　〈プレゼンテーション〉

日本の食文化や中国の食文化との違いを南澳実験学校 5 年生に発表した。日本の文化についてたくさんの質問を受けた。

実験学校の 5 年生の教室で、まずは自己紹介

一人一人が日本・新潟の食やマナーを紹介

日中の食文化の違いをイラストで説明

11：15〜11：35　〈授業見学〉

算数の授業を見学した。／1 億という数について考えてみようという内容であった。タブレット端末を用いてパワーポイントを活用しているグループがよく見られた。

11：40〜12：10　〈先生方との意見交換会〉

先生方に授業についての質問をしたり、私たちの発表についての意見を伺ったりした。／小学生の挙手の積極性は日本と中国で違いがあり、また挙手の仕方も日本と異なっていた。／私たちの発表を聞いた小学生たちが、日本と中国の文化の違いについての反応を間近で見ることができ、しっかりと準備をして発表に挑めたことに達成感を感じた。／先生方も生徒の様子を見て、どうしたら生徒が積極的に授業に参加を考えながら授業を構成していることがわかった。(以上、内山七海)

先生方との意見交換会を終えて

食堂で給食体験

貸し切りバスで移動

珠海の文化施設を見学

4　授業担当教員として―授業の振り返り

以下、筆者が「担当教員・同行員の振り返り」（『報告書』）に執筆した内容を転載する。

2019 年 4 月から準備を開始して学生 8 人（当初は 7 人）で訪中団を組織し、様々な経緯や準備作業を経て実現した訪中プログラムが無事に終わり、すでに 1 か月半余りが経過した。訪中の全日程を教員の立場から振り返るコメントはすでに、向山・田中先生からいただいているので、授業担当者の私としては、「学生主体の国際交流」のうち、「学生主体」の部分に光を当てつつ、「この経験をどう活かすか」という点について所感を述べたい。

第一に、今回の訪中団のメンバー構成と組織に関わってである。当初は 3 年生 4 人、2 年生 3 人の 7 人で始動した。ミーティング日時の調整は一貫して、創生学部のカリキュラム上の問題から難航する中、3 年生には、自分たちが主導権を取らなくてはとの責任感と自覚が徐々に生じていった。7 月に中村里紅さん（3 年生）が事情で不参加となり、急遽、1 年生 2 人の参加が決まったため、3 年生 3 人、2 年生 3 人、1 年生 1 人の 8 人体制となった。1 年生は中村さんや岡本団長のサポートを受け、キャッチアップに懸命であった。訪中団の活動全般を通しては、一部を除き、2 年生の貢献や関与が見えにくかった点が気にかかる。「先輩にお任せしついていく」との受動的姿勢から脱却し難かったようにも見受けられた。だが、準備終盤に、3 年生の意識／姿勢が「自分たちの手でやらねば」から「一緒にやってもらわなければ」と変容していくにつれ、2 年生にも一定の変化が見られた点は評価される。

各学年・各個人ともに、一連のプロセスの中でそれぞれ、多くを学んだことと思う。学生主体という場合、「自分たちで決める／考える／取り組む」ことが、最重要とみなされる。だが、忘れてはならないのは、この「自分たちで」には「各自が当事者として」「お互いに意思確認をして」「全員が合意して」の 3 要素が含まれる点である。今回の訪中への道のりを改めて振り返りながら、お互いの経験や力を発揮し合い、認め合い、活かし合う組織をつくるには何が必要なのか、「次」の同様な機会に活かすために、是非考えてみてほしい。

第二に、交流事業に向けた準備段階での人的ネットワークづくりについてである。今回の準備段階で訪中グループは 6～7 月、新潟大学グローバル教育センターに留学中の 5 人の珠海分校（うち 4 人は外国語学院）の学生を迎え、自ら企画して学内で計 3 回、学外で 1 回のランチ交流会を開催した。外注のオードブルやサンドイッチ、菓子や飲み物を自腹で購入して学修室で対面的交流を楽しみ、友人関係を構築している。また 5 人の帰国直前に、カフェランチのテーブルで、友好を深めた。同時並行して、外国語学院の王燕（Wendy）先生のバックアップで、5 人を含む 20 数人の SNS（WeChat）グループが立ち上がり、訪中時の学生交流に向けて、情報交換ややり取りを続けた。以上に加え、受講学生たちは一連の準備作業の中で、訪中団参加経験者の教育学部生、新大留学経験のある中国学生、中国留学中の教職大学院生・創生学部生など、多くの人びとの助言・援助を受けている。初めて何かを行う場合、それを成功裡に実現するにはこのように、協働してくれる人々との地道な人間関係づくりが不可欠であり、それも含め、「教員に連れて行ってもらう」「教員に決めてもらう」「教員の指示に従う」ことから脱却し、自分たちで多くの人びとに助けを求め、それらの手を借りながら、自分たちなりに取り組んだ今回の「人とつながる」「人から学ぶ」「人と学ぶ」経験を、今後の様々な取り組みにつなげ、活かしていってほしい。

第三に、改めて「国際交流」についてである。今回の「訪中団」の終了を、今回知り合った多くの中国人学生や中国の先生方、珠海分校や南奥実験学校、そして中国という社会や文化との関わりの終了、ひいては国際交流との関わりの終了、としてしまうのは、大変もったいない。「次」の何につなげられるかを考えることである。一人ひとりにとって「次」の意味は異なるであろうが、今回のすべての経験が、なつかしい「大学時代の思い出の一コマ」として「思い出づくり」の引き出しの中に放置してしまう前に、今回得たものが何だったのかをもう一度確認し、「次」の何にどうつなげていくのかを一度、丁寧に考えてみていただけると幸いである。

私の専門の生涯教育学の立場からすれば、教育とは、教育側が設定した環境や機会の中で生じる自律的な学習者の成長・発達を見守ることであり、そこで当事者だけでは解決・対応しきれない問題の解決や課題への対応に向けて、必要最低限の助言や支援を行うことである。今回の訪中プログラムは私にとっては、このような観点に立つ教育的な取り組みの一つであり、受講学生の皆さんの今後をフォローしていくことが、授業担当者としての自らの中長期的な教育評価の手がかりになるものと考えている。

以上の振り返りを踏まえ、授業 2 年目に当たる 2020

年度には、さらに発展的な国際交流活動を目指していた。だが、残念ながら、新型コロナウイルス（Covid19）の世界的蔓延＝パンデミックのため、2020 年 3 月に予定していた事前打ち合わせの訪中は、断念せざるを得なかった。2020 年度「地域・国際交流 B」の授業形態②は、結果として中止となった。今後、このような学生交流事業がいつから、またどのような形で可能になるのか、現時点では、見通しがかなり困難である。とはいえ、ウイルスの急速かつ広範な伝播状況は、私たちに、何よりも目を見張る程の「地球の狭さ・小ささ」（＝グローバリゼーション）を実感させた。他方、オンラインで地球の裏側の人々と瞬時に簡単にやり取りできる媒体・ツールの開発や発展も、私たちをよりグローバルな認識世界へといざなっている。これからのアフター／ウイズコロナの状況下で、新たな時代を切り拓いていく、従来にないチャレンジが求められている。SDGs が社会共通の課題として据えられる中、「ウイルスとの対峙／共生」をも余儀なくされる新たなグローバル時代に、たくましくも軽やかに活き活きと生き抜いていける若い世代を、どのように育成し伸ばしていくことが望まれるのか、そのために、学生たちにはどんな経験や機会が必要となるのか、それらを踏まえたとき、私たち教員には、どんな視野や知見、取り組みが求められるのだろうか。オンラインの果てしない彼方に、これらの可能性や展望を見出すべく、日々研鑽していきたい。

【謝辞】

2019 年度の訪中事業では、北京師範大学珠海校区（旧珠海分校）外国語学院陶文好院長の絶大なご協力をいただき、また京師澳園南澳実験学校（旧珠海分校）鄭鉄軍校長の行き届いたスケジュール設定と同先生方との心温まる交流機会をいただいた。また側面的サポートとして、北京師範大学珠海校日本教育研究センター胡学亮所長、同教育学院王建国院長、同元副学長・スポーツレジャー学院呉忠魁院長のご協力を得ることができた。外国語学院王燕講師には、同学院日本語専修学生の組織化や学生交流に関わる多くの段取りにご尽力いただいた。他に、珠海の学生の皆さん、新潟大学から珠海・広州に留学中の学生の皆さんに多大なご協力をいただいた。さらに、今回の訪中交流事業にあたっては、教育学部学習社会ネットワーク課程の相庭和彦教授（現教職大学院担当）はじめ教員・学生の皆さんが長年進めてこられた交流事業の成果に、学生たちも私も学ばせていただき、多大なバックアップもいただいた。 以上、すべての方に、記してお礼申し上げる。

【附録】

帰国後の学生の振り返り（最終レポート）（『報告書』より執筆学生の承諾を得て転載）

本授業では、履修学生から授業担当教員あてに提出されたレポートをもって、授業の「振り返り」とみなすこととした。以下、執筆学生の承諾を得て、『報告書』より全文を転載する。なお、各々のタイトルは、本人がつけたものをそのまま掲載し、冒頭の通し番号（Ⅰ～Ⅷ）のみ、追記した。

Ⅰ．創生学部訪中　報告

3 年　岡本留奈

【訪中団日程】

2019 年 9 月 19 日(木)～24 日(火)

1.　行動経過

9 月 20 日　1 日目

香港空港からシャトルバスと珠海分校のバスを乗り継ぎ北京師範大学珠海分校に到着した。香港から珠海に行くまでは何度か出国や入国を行ったが、空港内で先生方のアドバイスを受け、出国・入国にはどんな書類が必要かをみんなで確認し記入していたのでスムーズに動けた。日本ではこのような出入国の経験はないので緊張したが、書類をそろえてパスポートを持っていれば特に問題もなく通過することができ安心した。また荷物検査も皆スムーズに通過することができた。

珠海では初日ということで珠海側の交流会企画メンバーによる歓迎会が行われた。企画メンバーは新潟大学に留学していた人、日本に留学していた人、これから日本に留学しようと考えている人が中心であった。歓迎会ではこちらが用意したお土産を渡し、企画メンバーと交流を深めた。

歓迎会後はキャンパスツアーを行った。珠海は、日中は暑く熱中症の危険があるので夜の方が歩くのには良いとのことだった。道中では企画メンバーと様々な話をし、中国の大学生の生活や大学内にはどんな店があるのかなど、日本では知ることができない中国での生活・文化を体感することができた。

9 月 21 日　2 日目(外語学院学生との交流会)

日本の地域ごとの食文化をテーマとした交流会を行った。想定人数よりも学生の人数が増える、パソコンがうまくつかないなどのハプニングがあったが、珠海の学生が真剣に日本の食文化について楽しみながら学ぶことができていたと感じた。学生側の日本語のレベルに不安が当初はあったものの、訪中団メンバーが分からないところをフォローすることで解決できた。

午後からは普陀寺に行った。中国の寺と日本の寺の違いを知ることができた。個人的には寺で様々なワークショップが行われ、珠海の人々の憩いの場かつ学びの場になっていることが興味深かった。

9 月 22 日　2 日目(珠海市観光＆広州市到着)

梅渓碑坊とショッピングモールを訪れた。中国の昔ながらの邸宅を見学し、歴史を感じることができた。またショッピングモールでは中国の人が普段どんな食事をしているのかを知ることができ、ショッピングモールの規模の大きさに驚いた。

9 月 23 日(南澳実験学校交流会＆広州観光)

南澳実験学校で小学生を前に日中の食文化の違いをテーマとして交流会を行った。当初は緊張していたが食事の写真を見せたり歌を歌うことで緊張もほぐれ、小学生の興味・関心を継続させることができたと思う。写真を多くしたことはよかった点だと感じた。交流会後は小学生から多くの質問が寄せられ、日本に関心を持っている子が多いと感じた。またゴミの分別についての質問が小学生からでた。広州では現在、ゴミの分別について対策が取られ始めており、日本のゴミの分別について答えたところ小学生だけではなく先生方も驚いた様子だった。交流会後は実験学校の先生方からアドバイスをいただいた。「なぜ日中でこのような食文化の差が生まれるのかがあればもっと良いと思う」という意見には、短い時間で分かりやすく授業を行う難しさを感じた。

広州観光では中国第三の都市である広州市がいかに大きいかを体感した。移動の切符や図書館の入退場などにキャッシュレス化が進んでいて驚いた。

2.　団長として訪中を振り返って

訪中前の準備段階においては、創生学部として初めての訪中団ということで皆経験がなく、どんなことをして何を決めたらよいのかということが不明確で大変だった。また最初の頃は仕事の分担や連絡の取り方、情報共有の仕方でどれが一番効率の良い方法なのかを 3 年を中心に話し合い改善していくといった試行錯誤の繰り返しだった。しかし問題があったときやどうしたらよいか迷ったときなどは、先生方に相談したり、幹部間や全体ミーティングでの話し合いを繰り返し改

善していくことができたと思う。

夏季休暇中では各々のスケジュール調整がとても難しく、全員でのミーティングはもちろん各役割の打ち合わせもなかなかできない状況が続いた。また、中国側との WeChat での意思疎通の難しさなども実感することとなった。個人的には、どの部分をどれくらい中国の学生に協力をお願いすればよいのかが分からず戸惑うことも多かった。また各役割の仕事の分担もどうすればよいのか戸惑うことが多く、役割ごとでの意思疎通がとれていない部分もあり、細かな情報共有の大切さを学ぶことができた。

実際の訪中では当日にいきなり活動内容をより良い方向に変更する中国のやり方の戸惑うこともあったものの、いろいろな方が私たち訪中団の事を考えて協力してくださり、非常にスムーズに活動を行うことができた。ハプニングが起こった際も現地の学生や先生方の協力やサポートもあり解決することができ、自分が持っていた中国のイメージを変えるものとなった。また中国においても幹部・会計間のミーティングは夜に行うことで、情報共有を行った。

3.　反省点と次回に生かしてほしいこと

- 夏季休暇中のミーティングなどを考慮したうえでスケジュール調整を行うこと

交流会のリハーサルや現地の学生・先生方との連絡調整などを行うため、夏季休暇中が一番メインの準備期間である。本番で予定変更もあるが、だれがどのように動くかといった確認を緻密にするためにもスケジュール調整には注意を払うと良いと思う。

- 全員でのシミュレーション

何日にだれがどのように動くのか、全体での移動はどうするのかといった細かな動きのシミュレーションは必ず行ったほうが良い。訪中団メンバー全員が動きを把握することで不慣れな海外での移動の不安をなくすことができる。

- 情報共有

今回の訪中では情報共有の難しさを実感した。役割ごとに進捗の確認や今困っていることを共有するといった改善をすると良かったと思う。

4.　訪中で学んだこと

何よりもまず団長としてチームをまとめることの難しさを今回の訪中において学ぶことができた。最初の方では自分が率先して物事を進めてしまい、役割分担がうまくできなかった。リーダーの役割は各役割や進行の調整を行うことだというアドバイスを先生からいただき、ミーティングを重ねることで徐々にではあるが自分一人で物事を進めるという姿勢を変えることができたと思う。このような経験や訪中団の代表として現地の学生や先生方の前で意見を言ったり、感謝を述べるという経験は自分を成長させるものとなったと思う。

また今回の訪中では中国という国について教科書やメディアからではない、生きた情報を学ぶことができたと思う。食事を通して中国の食文化や食事マナーを学び、学生や先生方との交流では中国の人の温かさを学ぶことができた。日本についてもっと知りたい、日本と交流を深めたいという気持ちを中国の人が持っていて、私たちと交流してくれていると感じた。

今回の訪中は単なる旅行ではなく、多くの学びを得るものであり新潟大学の代表として中国を訪れているという責任感や緊張感のあるものだった。私自身いろいろな経験をして成長できたと感じたのに加え、他のメンバーも今回の訪中を通して自分の将来について考えるきっかけとなる有意義なものであったと言える。

今回の訪中を実現させてくださった中国の先生方や学生、私たちの活動を支えてくださった渡邊先生・向山先生・田中先生、通訳をしてくださった五十嵐さん・周さん、私の至らないところをサポートしてくれた訪中団メンバーに感謝の意を表する。今後も創生学部から訪中団が結成され、中国との交流が継続されることを願う。

Ⅱ　地域国際交流 B を振り返って

3 年　小根澤茉莉

1. はじめに

中国という国は日本にとって、かかわりの深い国である。古代から日本は中国から大きな影響を受けてきた。中国から伝わった文化は日本で形を変えて浸透し、日本の文化を形成していった。現代においても中国の文化の影響は大きい。ラーメンなどの中華料理は、中国の伝統的な食をもとに、日本人の口に合うものにアレンジされて日本中で親しまれている。日本人に受け入れやすい味付けの中華料理が開発され、食べたいときにいつでも食べられるようになっている。逆に日本から中国に伝わった文化もある。中国では至る所で日本のアニメキャラクターを見ることができる。

しかし、日中関係は文化交流だけで語ることはできない。戦争をきっかけとして引き起こされた多くの問題は、簡単に解決できない問題である。中国と日本は地理的にも近いため、領土問題も起こっている。また、経済的にも中国と日本は深い関係がある。中国にはいくつもの日本の企業が進出し、雇用を生み出している。日本で売られている製品には中国で作られたものが非常に多い。

日本と中国はいくつもの問題を抱えている。それと同時に切っては切れない仲であり、大切なパートナーである。国家間の問題は解決が非常に難しく、無視してもいいものではない。しかし、個人間で良好な関係を気付くことは難しいことではない。大きな問題に引きずられて、相手のことを深く知る前に苦手意識を持ってしまってはいないだろうか。日本にいろいろな人がいるように、中国人もいろいろな考えを持った人がいる。中国人としてひとくくりに考えてしまうのではなく、尊敬できる先生として、友人として、相手を見ることで友好な関係を築くことができる。現在のいくつかの問題も、お互いの文化を分かり合えていないことで深刻化しているものがある。異国の人と実際に会って対話し、文化を学ぶことは、非常に大切なことである。

私はこの授業を終えて、実際に対話して理解を深めることの大切さを再確認した。このレポートでは、授業を終えて自分の考え方がどう変わったのか、これからどうやって自分の学びを構成していくか、そしてそう思うに至った経緯や体験などを述べていく。

2. 訪中前の思いと活動について

私は 3 年生の夏休みという時期に、実際に訪れて社会について考える機会を作りたいと思い、この授業に参加した。この授業で中国に訪れる前、私は中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。たとえば、買い物をしているときである。中国産と日本産のモノを比べたときに、中国産のものは安価で量が多い。値段を比べた結果中国産のものを手にすることはとても多いが、金銭的な余裕があれば中国産でないものを選びたいという気持ちがある。中国の製品は日本のものに比べて質が劣るという考え方があった。また、ニュースを見ていても中国と日本が対立している事件が取り上げられる。漠然と中国について、そのように日本とは相容れないイメージを持っていたが、自分の目で見て中国について考えたいと決意し、この授業に取り組んだ。

地域国際交流 B で訪中するにあたり、一番力を入れたことは日本文化についての交流会である。私は、北京師範大学珠海分校で行う外語学院学生との交流会を担当した。交流会は中国人で日本について勉強している学生相手に、日本の文化をプレゼンするものである。今回は日本の食文化についてプレゼンすることになり、日本の地域ごとに特色のある料理を紹介した。内容は日本食についてのプレゼンテーション、アイスブレイク、グループ活動の 3 つである。プレゼンテーションの内容がアイスブレイクやグループ活動につながるように工夫して構成を考えた。

事前準備で悩んだ点は、中国人と日本人の考え方の違いによるものである。日本人はなにか仕事を行うときに、綿密に準備してタイムスケジュールなどをしっかりと立てておくことが望ましいと一般的に考えられている。一方中国では、臨機応変に対応できることが優秀であるという考え方がある。交流会に参加する人数が確定できず、持っていく物品の数や交流会の話の進め方を決めることが難しかった。実際交流会になると、想定していた倍ほどの中国側の学生が参加してくれた。資料の数や、部屋の規模など想定外の状況に対応するのは大変であったが、事前に想定通りには進まないということを意識していたので、対応することができた。中国側の先生や学生の協力も大きく、想定通りの流れではなかったが、無事に交流会を進めることができた。事前の準備は大変であったが、真剣に取り組んだ成果が出た。

3. 中国の学校を視察して

今回の訪中では 2 つの教育施設を訪問した。一つは北京師範大学珠海分校。もう一つは広州南澳実験学校である。北京師範大学朱海分校は学生が大学院生を合わせて 2 万人在籍する大きな大学である。中国でトップクラスの大学であり、特に教育学・心理学・中国語言文学の 3 学科は中国トップの実力を持っている。広州南澳実験学校は 9 年一貫教育を行う私立学校であり、その中でも小学校教育にあたる学年を今回は視察した。

二つの学校では日本文化についてプレゼンを行う機会があった。一回目は北京師範大学珠海分校の外語学院学生に対して日本の食文化についてプレゼンとワークショップを行った。地域ごとの気候などの特徴をもとに、あまり有名でない地域の料理なども紹介した。プレゼンとしては、日本語学部で日本の地域について深く学ぶ授業があるようで、すでに知っている情報が多かったようだった。また、漢字の単語は知らない単

語でも受け入れてもらいやすいが、カタカナの単語は伝わりにくい。そこに配慮して、カタカナの単語にはすべて写真などを入れるなど、工夫が必要だったと反省した。

2 回目は広州南澳実験学校の小学 5 年生に対して日本の食文化について授業を行った。中国との違いやマナーに焦点を当てた内容で、小学生の反応も良かった。歌を歌い、問いかけを入れることで、小学生の興味を引けたのではないかと思う。意見交換会で実験学校の先生方から言われたように、そのマナーや文化がある理由をもっときちんと調べるべきだったと感じる。小学生からも「なぜお寿司は米の上に魚がのっているのか」という問いかけがあった。質問を想定することは非常に難しいことではあるが、いくつか質問を想定しておくとよかったかもしれないと感じた。日本人からすると当たり前で、思ってもみなかった疑問を共有できたことは有意義なことだと思う。

日本文化を伝えるための活動をするにあたって、改めて日本の文化について考える機会になった。また、中国の文化と比較することで日本の文化を認識できた。今回訪問した学校を見て感じたことは、とてもレベルが高い教育を受けられる場所が整っているということである。設備がとても整っていて、生徒・学生は学習や学校生活に専念することができる。北京師範学校朱海分校は、キャンパスの中に買い物をする場所や食事をする場所が充実している。寮で生活する学生がとても多いので、キャンパス内にそういった施設があることで時間を有効的に使うことができる。キャンパスはとても広いが、学生が利用できる安価なキャンパスバスなどが利用できる。

実験学校にはいくつもの独特なカリキュラムが用意されていた。勉強以外にも小さいころから様々な体験ができることはすごいことだと思った。また、授業には工夫がされていて、英語や算数など苦手だと思う生徒が多いだろう科目も、生徒が楽しそうに学んでいた。

今回訪れることができた二つの学校は、かなり設備的にも学力的にもレベルが高い学校であった。この学校で行われているものは中国の一般的な教育とは言えないだろう。また、自分が過去の学習や、地域国際交流 A で関わってきた学校は日本の一般的な公立学校であった。単純に今の知識で日本と中国の教育について比べることはできない。しかし、今回の視察で、日本の学校に取り入れるべきだと思うことも多かった。

4. 中国の生活や文化について

中国で一番衝撃を受けたことは、モバイル決済の普及である。中国ではスマホ決済が一番ポピュラーな支払方法になっていた。バーコードをスマホで読み取って支払いを行う。スマホ決済と言っても、日本ではバーコードを読み取る方法よりも、機械にスマホをかざす方法の方が主流である。機械を用意するよりも、バーコードだけ用意する方がお店側の負担は小さいのではないかと思った。このような方法が主流なことも、スマホ決済が普及した理由の一つなのではないかと思った。中国のお店では現金は使えるものの、お釣りなどが十分にお店になく、苦労することが多かった。電子決済は中国に口座を持ってないと利用できないため、短期間しか中国に滞在しない人には使えない。例えば日本の Suica などのように、プリペイドカードなどがあるとよいと感じた。逆に日本に来た中国人留学生は、電子マネーが使えない場所が多くて不便だと思うそうだ。今回は朱海の学生や、同行していただいた人に協力してもらって支払いを済ませることができた。

また、中国の文化見学の一つとして、朱海普陀寺というお寺を見学した。中国は多宗教が併存する国であり、仏教もその一つである。中国の仏教はもともとインドから伝来した。普陀寺は石でできた門が特徴的である。建造物の屋根や壁には細かく装飾が施されている。日本の寺社と比べ、装飾がカラフルで豪華な見た目をしている。日本の寺社は木造が多く、木彫りなどの装飾はあるものの、色は塗り直されないことが多い。質素で落ち着いた見た目をしている。日本のお寺が落ち着いた見た目をしているのは、中国の唐の時代の文化を受けているため、という説がある。京都はもともと唐の都、長安をイメージして作られた。朱海にある寺は、唐より後の時代の影響を強く受けているが、日本のお寺にはまだ唐の文化が残っている。このことは日本に帰ってから調べて知ったことである。いままで海外のいくつかのお寺に訪れたことがあるが、中国の寺と同じように豪華でカラフルな印象を受けた。今までは日本のお寺を、日本独自の文化発展によるものだと思っていた。中国のお寺と結びつけて考えたことで、日本の文化についても発見があった。

広州の街を見て回る機会があったのだが、高層ビルが立ち並び、とても洗練された都市であった。日本の都市の東京や大阪などと比べ、見える建物すべてが新しくて大きく、きれいだった。そういうところからも、いかに中国が急激な発展をしたのかがうかがえる。朱海では、どこを訪れても工事をしている現場を見かけ

た。まさに都市が発展し、開発されている過程を見ることができた。日本は清潔であるというイメージが強く、逆に中国などのアジアの国は清潔でないというイメージを持つ人は日本人には多いと思う。確かに、中国人と日本人では文化も違うため､気にする点も違い、日本と同じような清潔さを求めることはできない。しかし今回訪れた中国の都市では、不潔とは決して言えないような､非常に洗練された生活が確立されていた。中国は非常に広大な国であり、まだまだ整備が行き届いてない地域は多いだろう。それでも中国がどれだけ技術力や資本が充実した国であるかということを、今回の訪中では感じることができた。

5. まとめ

この授業を通して一番強く感じたことは、異文化を理解するためには実際にその文化の人と交流することが大切だということである。もちろんニュースや本から得た知識は大切である。知識がなくては、人と会っても意見を交換することができない｡新聞やニュース、本などから情報を得た後、それを自分の経験と結びつけることが必要である。

また、今回の訪中ではとても多くの人のサポートを受けて活動を行った。今までの学生生活で、私にはあまり留学生の人と接したりサポートをしたりする経験はなかった。留学生と接することは、海外の人と接するとても身近な方法である。学生である間は、留学生と接する機会がとてもたくさん用意されている。残り少ない学生生活であるが、機会を無駄にしないようにいろいろなことに挑戦していきたい。今回出会った中国の学生はとても勉強熱心で、親切で、フレンドリーだった。多くの人の協力を得ることで、今回の交流会を成功させることができた。ただ中国について知るだけではなく、自分の文化交流に対する考え方が変わるような体験ができた。

今回の訪中では、中国についてほんの一部分しか知ることができなかったと感じる。しかし、来る前に持っていた偏ったイメージは薄れた。自分の目で確かめられた部分はまだ少ないので、これで満足せずに中国について理解を深めたい。

Ⅲ　2019 年度 地域・国際交流 B

3 年　高田敦子

1. はじめに

今回，中国へ実際に行って様々な経験をすることができて非常に良かった。例えば、中国の小学校における英語や算数の授業見学や中国人の大学生との交流などである。これらの経験を通して、私は、これまで漠然としていた中国と日本における文化の違いについて、以前よりはっきりとしたイメージをもつようになった。また、中国へ訪れるため日本で準備する際に、学年の違う学生との交流やプレゼンテーションの準備をする時間が多くあった。これは、私があまり普段経験しないことであり、非常に自分のためになることであったように感じる。

2. 主な活動内容

9 月 20 日　中国の大学生との交流
21 日　交流会
中国の大学生と珠海市観光
22 日　珠海市観光、南澳実験学校の先生方との食事会
23 日　交流会、広州市観光、食事会

3. 今回の経験を通して

様々な経験を通して、私は特に驚いたことが 2 つある。

1 つ目は、中国の小学校の英語の授業である。私が小学生のとき、英語の授業は高学年でしか行われておらず、授業内容も英語の歌を歌ったり簡単な自己紹介をしたりするだけであった。しかし、今回見学させていただいた南澳実験学校では、小学校低学年にも関わらず、英単語を流暢に発音したり短文を学び暗唱したりしていた。子どもたちの英語力にも驚いたが、授業内容も非常に魅力的で驚きがあった。見学させていただいた授業には、様々な工夫が施されており、私が見学していても面白いと感じるような授業が行われていた｡例えば､子どもたちが飽きずに英語を学べるよう、授業の途中でアニメーションを挟み、実際にそのアニメーションの内容を子どもたちが英語で再現するという時間が設けられていた。子どもたちは、あまり教科書を使わない代わりにそういった体験を通して楽しく英語を学んでいるように感じた。また、私は、英語の授業中に、先生はほとんど中国語を使わずに英語のみで授業を行っていることにも驚いた。英語だけで行わ

れる授業を理解するのは、大学生の私にも難しく、私は授業を聞くことを諦めてしまうだろう。しかし、小学生たちは、しっかりと先生の話に耳を傾け、活発に授業に参加していた。そんな小学生の姿を見て、私も英語の勉強を頑張ろうと感じた。

2 つ目は、食文化の違いである。私たちは中国で飲茶を体験した。その際、自分の使う器を、ご飯を食べる前に自分で洗うことを知って驚いた。お茶やお湯を器に入れて箸などの食器を洗うのは、私には考えられないことであったからだ。私にとって、その経験は非常に面白いものであった。また、南澳実験学校の先生方との食事会において、中国の宴会でのルールやマナーを教えていただいた。私は、中国を訪問する前に中国のドラマなどを見ていて、なぜ何回も乾杯をするのだろうと疑問に感じていた。実際に、南澳実験学校の校長先生が 3 回挨拶をするのだと仰っているのをきいて、中国のお酒の文化によるものであったのだと納得がいった。そのうえ、中国における乾杯は、杯をあけることであることを知り、さらに驚いた。杯をあけるだけでなく、中国のお酒は日本のお酒よりもアルコール度数が強いのに、中国人はそれを何杯も飲んでいた。日本人との体のつくりの違いはどのように生まれるのか、ということを疑問に感じたため、調べたいと考えている。

さらに、今回の中国への訪問を経て、私は日本について改めてしっかりと学ぶ必要があると感じた。今回の中国での活動は、ほとんどを中国の大学生とともに行った。そのため、例えば飲茶に関するマナーなどというような、中国に関するマナーや歴史などを知ることができてよかったと感じる。日本人だけで行っていたならば、私たちは本当のマナーなどを知らないままであっただろう。同時に、私が異文化を持つひとと日本を巡り、日本に関するマナーや歴史について尋ねられた際にしっかりと答えられるだろうか、ということを考えさせられた。おそらくそれは、現時点で私には難しいことであるため、大学生のうちに日本に関することを学びたいと考える。

私は、外国の異文化に興味があり、これまで韓国や中国などの様々な国の文化を学んできた。これまで、日本にはあまり関心がなく海外にばかり目を向けてきた。けれども、今回の中国訪問によって自国である日本について学び理解することの大切さに気付くことができた。

4. 活動を通してよかった点・反省点とその対策

〈よかった点〉

・会計に余裕があった点

多めに計算したことで、お金が足りなくなることがなくてよかった。

・事前に中国の留学生との交流があった点

新潟大学に留学に来ていた学生と交流会をしたことで、実際に中国へ行った際によりフレンドリーに接することができた。

・小学生に対するプレゼンテーションをしっかり聞いてもらえた点

日本の歌を交えることで飽きない対策ができたと感じる。南澳実験学校の先生方にいただいたアドバイスをこれからの活動に活かしたいと考える。

・活動中にメモを取っていた点

例えば、簡単な日記や南澳実験学校で先生方のお話を伺った際に書き留めておいたアドバイス、授業中の工夫に関することなど、後から見返して自分のためになるものであった。

〈反省点〉

・メンバー全員で集まる時間が少なかった　点

メンバー間での意思・情報の共有やプレゼンテーションのリハーサルが完全にはできていなかった。活動中に夏休みを挟むことは元々わかっていたことであり、もっと早くから、全員のスケジュールを押さえておく必要があったと考える。

（対策）スケジュール管理を担当の人だけでなく全員で協力して行う。

・中国訪問直前に慌てることが多かった点

例えば、名刺など必要なものの準備やプレゼンテーションに関して、直前になって慌てて行動する事が多かったように感じる。次回は、もっと余裕のある活動をするために、早めの行動ができるように心がけたいと考える。中国へ訪問する自覚をより早くから持つ必要があった。

（対策）早いうちにメンバー全員で当日のシミュレーションを 2 回ほど行う。

・仕事量に偏りがあった点

団長の負担が非常に大きかったように感じる。そのため、もっと他の人とのコミュニケーションなどを通して、仕事の共有のしやすい関係性を築くことが必要だと感じる。

（対策）もっとメンバー間でコミュニケーションをとったり、各自の状況確認をおこなったりする。

5. まとめ

私は、今回の活動を通して様々なことを学ぶことができた。中国の文化に関することはもちろん、日本の文化や歴史について知ることの大切さも学ぶことができたと感じている。今回の経験から、私は海外の文化に関する勉強だけでなく、同時に日本の文化に関する勉強もしようと考えている。また、中国で活動している日本人大学院生と関わったことで、私ももっと外国語の勉強を頑張りたいと感じた。加えて、考えることも大切だが、まず行動をしてみるということも大切であると実感できた。私は、行動する前に考え込むことが多いため、まずは行動という言葉を心にとどめておきたいと感じる。海外について学ぶ際、海外留学へ行くことはできなくても、日本でできることを自分なりにしっかりとこなすことが大切であると考えるようにもなった。新潟大学で留学生など海外の方と関わる機会がある際には、積極的に参加していこうと考える。どんなことも自分の考え方や行動次第で変わるのだと実感できた中国訪問であった。次、中国へ行くことがあれば、今度は私が中国語で中国にいる人たちと関われるように勉強を頑張りたいと感じる。

Ⅳ　違いを理解し、間違いに気づく

２年　内山七海

私は以前から中国に興味を持っていた。中国はたくさんの安価な衣服や食品、機械、また観光客や留学生などを日本に送り出す。身近なところでも中国語を見かけるくらい、私たちの生活には中国との深いかかわりがあると考える。しかしながら、中国のイメージは PM2.5 などの環境汚染や最近では香港においてのデモなど、なんだか悪いイメージがたくさんあった。行く前にも本当に無事に帰ってこられるのか、犯罪に遭うことはないだろうかと不安に思うことが多かった。

今回、授業を通して実際に中国に行って感じたことや学んだことがたくさんあった。まず、1 番印象深かったことは歓迎の気持ちの大きさである。現地についたとき、迎えに来てくれた中国の学生は日本語で書いて作った立札を掲げ、私たちに分かりやすいように待っていてくれた。北京師範大学についたときにも、重いキャリーケースを持ってきた私たちを気遣い、丁寧にホテルまで運んでくれた。私はなぜか中国の人はものを雑に扱うイメージを持っていたが、そんなところは微塵もなかった。私が中国の学生に大学のことや中国のことについて何か質問をしたとき、もし分からない日本語があっても理解しようとスマートフォンで意味を調べたり、質問に対しても本当に詳しく答えてくれたり、興味があることや知らないことを丁寧に説明してくれた。日本についての質問もたくさんしてくれて、日本のことがどんなに好きで、私たちをどれだけ歓迎してくれているのかを強く感じた。

次に、私たちの発表を振り返ってみる。私は 23 日の交流会と観光プランを担当した。交流会で日本の食文化について発表することにしていたが、いざ日本の食文化について考えてみたところ、自分が今まで過ごしてきたなかでこれが日本の特徴だと感じる機会が多くなかったため、私も日本について学ぶ機会となった。日本の箸は中国や韓国と違うこと、ラーメンを食べるときに音を立ててすするのは日本だけということ、いただきますとごちそうさまと感謝の気持ちを持つことの大切さなど、初めて知ったことや再確認したことで、近い国ながらも文化が異なることを認識できた。実際の交流会で中国の小学生に向けて発表したところ、私たちの話に興味を持ち、集中して聴いてくれた。質問においても日本との手の挙げ方や発言の多さなど異なるところがあることに気づくことができた。後日、発表を聴いた児童がいただきますやごちそうさまと言ってくれることを聞いたときには、私たちが発表をしたことがよく伝わっていることにとても感動した。

続いて、準備を進める段階で感じたことについて振り返る。観光についてもプランを立てては取り消すことを繰り返し、想像できないこともあるため未知の場所へ行くことはたくさんの調べる時間が必要だとわかった。実際にチャットで中国の学生とやりとりをする機会もあり、経験者の話を聴いたり、いろいろ調べてみたりとたくさんの段階を踏んで計画を練り上げていくことには苦労を感じることもあった。しかし、実際に観光をするなかでメンバーが楽しそうにしていたり、記念撮影をしたりという姿を見ていて、準備で感じた苦労もさまざまあったが、なんとかここまで来ることができたという達成感を感じた。無事に日本に着陸したとき、活動を終えた達成感か日本に着いた安心感か、何かこみ上げてくるものがあった。

続いて観光のときに感じたことは、人口の多さゆえに街がとてもにぎわっているということと、交通において日本との違いがあるということだ。私の地元にも商店街はあるが、高齢化や建物の老朽化などにより、シャッター街となってしまったところがよく見られる。中国でたくさんの人で賑わう下町の様子を見て、人々が住んでいる温かさやお店の多様性を感じた。地域に

よって状況はさまざまであるとは考えられるが、私の地元にもこのような活気が戻ったらどんなに素晴らしいだろうかと想像をかき立てられた。しかし、交通においては怖さを感じる点が多かった。私は最近自動車免許を取得した。自動車学校では交通ルールや周りへの気配りをしっかりと教え込まれる。それでも実際に道路を運転するときは交通の流れがあり、みんながみんな教科書通りに運転するわけではないのでそれに順応することには苦労する。中国の運転ははっきり言うと荒いとも言える。頻繁に車線変更を行ったり、クラクションを鳴らしたりすることは日常茶飯事。人が歩いているからと言って徐行することはなく、クラクションを鳴らしながら走り去ってゆく。私たちが中国にいる間でも、なぜ事故を見かけなかったのか不思議なくらいである。それほど運転技術も相当なものなのかもしれない。

私たちのテーマでもあった食を通して感じたことは、相手との心の距離を縮めるためや相手への尊敬の気持ちを示すために乾杯があるということである。アルコール度数の高い白酒を飲むのは少し大変だったが、自分の相手に対する尊敬の気持ちを示すためにも乾杯は大切なことだと感じた。私は中国語を全く話すことができないが、中国の先生方に乾杯をしに行くと、嬉しそうな顔をされていた。言葉で伝えることは難しくても、身振り手振りなど何か伝えようという気持ちがあれば、相手に自分の気持ちを伝えられることがよくわかった。ちなみに、アルコールが 52 度もある白酒は香りがフルーティーで、パイナップルのようであった。中国料理は地方によって違いがあり、広東料理は日本人の口に合いやすい、四川料理は唐辛子を使っていて辛い、などそれぞれに特徴があることがわかった。飲茶は時々休みの日に家族ですると中国の学生から聞いた。朝お店に入り、お昼くらいまでお茶と料理を楽しみながら、家族でおしゃべりをするのだという。家族で過ごすことを大切にし、みんなでお茶や美味しい料理を楽しむことはとても素晴らしい文化だと感じた。

最後に、中国の人は割り込んで来たり、ぶつかりそうになったり、日本人の雰囲気とは確かに違うところがあったが、同じテーブルを囲み、同じ気持ちで乾杯し、同じ料理を一緒に食べればとても仲良くなれる。中国の学生も、実験学校の先生方も、道ですれ違った人たちもみんな同じ中国に住む人たちで、勝手なイメージを持ってしまったことは間違っていた。しかし、この授業を通して、実際に中国のたくさんの人と知り合えたこと、文化の違いを知ってお互いを理解しあえたこと、濃い時間を共有できたことは本当に貴重で素晴らしい経験になった。この出会いをこれからも大切にしていきたい。

Ⅴ　地域国際交流Ｂ　訪中団報告書

2 年　大竹萌

私の主な役割は、訪中するまでの間であれば、訪中 3 日目の珠海観光の計画と、しおり作成を行い、訪中の間は、会計で訪中 5 日間のお金の管理を行った。珠海観光の計画は、訪問する場所を決めたり、移動費について調べ移動手段を決めたり、観光の予定を珠海の学生に連絡し一緒に観光してくれるか聞いたりという感じだった。訪問する場所は色々変更しながらも決まり、移動も貸し切りバスになり、向こうの方々に手配もして頂いた。計画はしたけれど、当日は特に役目を果たした感じはなく、2 日目の交流会や 4 日目のプレゼン担当の方の仕事量と比べると比較的楽だったと思う。私の当日までの準備は、圧倒的にしおり作成が大変だったように思える。しおり作成は、取り掛かりが遅かったこともあり、色々と調べていたらギリギリになってしまった。私自身が訪中も海外旅行も初めてで知識がなかったため、参考にした去年の教育学部の訪中のしおりよりも出来るだけ分かりやすくしようとしたら時間がかかった。会計の役割は、訪中 5 日間のお金の管理をしたといっても、換金したお金を持ちホテル代を出したり、その日分のお金を渡されその日管理したりした程度だった。訪中するまではほとんど役に立っておらず、サポート程度だった。

1 日目は、朝から中国到着に向けて移動した。夕方中国の珠海に到着し、夜ご飯を北京師範大学珠海分校の学生たちと食べ、キャンパス内を軽く散歩した。着いてすぐ感じたことは、日本と比べて、匂いや雰囲気が違うなということである。言葉にできないが、日本ではないような慣れない独特な匂いや雰囲気だった。夜ご飯は、大学近く(大学内？) のご飯屋で食べたが、見たこともない料理を色々と食べることが出来た。色々注文し全員で割りっても 1 人 40 元(600 円程度)と安く、物価が低く生活しやすそうだと感じた。特に美味しいと感じた料理は、金銀饅頭、青菜(チンツァイ)である。金銀饅頭は、蒸しパンみたいな白いもの(銀)と、それを揚げた茶色いもの(銀)の 2 種である。練乳のようなものを付けて食べるため甘いが、中国では主食としても食べられるらしく驚いた。青菜は、青菜を油で

炒め味付けしただけのものであるが、シンプルで安心して食べられる味だった。

2 日目は、午前に北京師範大学珠海分校の学生たちと交流を深め、午後は学生たちに古いお寺や街を案内していただいた。交流会では、日本についての紹介をし、グループ対抗で日本の郷土料理等の場所を当てるようなワークショップを行った。日本についての紹介は、日本語を学んでいる珠海の学生にも日本語の原稿を渡して、パワーポイントを使って発表したが、原稿を見ながら聞いても難しいようで、更に簡単な日本語で説明出来たら良かったと考える。お寺や街を観光した際は、タクシーで移動したが、タクシーの手配も支払いも珠海の学生がすべてやってくれた。日本と勝手が違うし、どこからどこまで移動するか分からない私たちにとって、タクシーをアプリか何かで予約し支払いを済ませてくれたのはとても助かった。キャッシュレス化が進む中国で、現金しか利用出来ない私たちは、珠海の学生にお金を借りることが多かったように思える。珠海の学生に電子マネーで支払いをしてもらい、後で現金で返金したが、細かいお金を返す際は大きなお金を崩さなくてはならないため、細かく崩すのも苦労した。

3 日目は、珠海の下町を観光し、夕方から広州へ移動した。夜ご飯は広州南澳実験学校の先生方と円卓を囲んだ。珠海の下町観光は、古い邸宅とオペラハウスを観光し、飲茶を体験する予定だったが、当日は時間が押し、古い邸宅を観光した後飲茶を体験し、ショッピングモールで買い物をして終わった。古い邸宅の施設名は梅溪牌坊(Meixi royal stone archways)である。梅溪牌坊は、珠海市前山鎮の冲梅溪村にあり、面積は 12 万 6 千㎡ととても広かった。中国初代ハワイ領事であった陳芳の故居、陳家花園、梅溪石牌坊、陳芳家族墓園から構成され、これらを中心とした観光地である。ここには陳芳家史展、珠海名人蝋人形展などが展示されており、珠海の 100 年の歴史が詰まった場所であった。昔の人々の生活を感じることが出来たため、観光できて良かったと考える。お昼は飲茶を体験した。飲茶とは、中国茶を飲みながら点心を食べることであり、中国の方は朝早くにお店に来て、お昼前までお茶を飲みながら点心を食べてゆっくり過ごすらしい。飲茶では、席についたら自分の食器をお茶で洗うことや、お茶がなくなったらポットの蓋を開けてないことをアピールすること、注文ではすべてのメニューが書いてある紙に注文したい点心の数を記入すること等、日本ではないようなルールがあり、知ることが出来た。時間が足りず、オペラハウスを観光できなかったことは残念であるが、それ以上に様々な事を体験できたため満足である。夜ご飯は実験学校の先生方と四川料理の円卓を囲んだ。円卓でも、誰かが料理を取っていたら円卓を回してはいけないことや、使う食器で小さく深めの皿には食べる料理を入れ、大きく平たい皿には食べ残し等を入れると店の人が皿を取り替えてくれること、円卓にグラスの底を 1 回置くことで全員と乾杯している意味を表すこと等、中国のマナーを学ぶことが出来た。

4 日目は、午前は広州南澳実験学校の見学をし、日本の食文化について発表した。お昼は実験学校の給食を体験した。午後は広州を観光し、夜ご飯は実験学校の先生方と円卓を囲んだ。実験学校の見学では、日本では見られないような授業を見学することが出来た。英語の授業では、単語を学んで発音したり、ネズミと人間のショートアニメを見た後、その一場面を何人かの小学生が演じていたりと、実践的に使えるような英語を学ぶ授業が多いように思えた。日本の英語の授業では、読み書きは身につくが、会話の場面では役に立つことが少ないように思える。一方で今回関わった珠海の学生は、日本語を学んでいるため日本語はもちろん、英語も普通に話すことが出来る。中国の英語の授業では、会話でも実際に使えるような英語を学ぶことが出来るのだろうと思った。私たち訪中団は、中国語はほとんど話せず、珠海の学生の学んでいる日本語頼りであったり、新潟大学の院生で通訳をしてくださった五十嵐さん頼りであったりしたため、中国語でなくても、もう少し英語を話せれば他のことも話せて有意義であったかなと考える。また、小学校の段階で、プログラミング言語を学習していて驚いた。私が基礎ゼミⅡの熊野ゼミで少し学んだ Scratch を小学生も学んでいて、早い段階からこのような分野にも触れられる授業があるのは良い環境であるなと感じた。

5 日目は、朝から帰国に向けて移動するだけで終わった。様々な方が案内等のサポートしてくださったおかげで無事に帰国することが出来た。

今回、初めての海外で初めての中国だった。中国と日本は似ているところもあるが、しかし全く違う国だと感じた。似ているものを食べているが、味付けは日本と全く似ていない。何を買うにしてもどこもキャッシュレスで、スマートフォンで決済を済ませている。学生は勉強熱心で、朝から夜まで授業で予習復習して就寝する。住み慣れた日本が良いなと思う一方で、日本と違って良いなと思うところもあった。実際に中国の方と関わることで今までイメージしていた中国と違

うということも知ることが出来てとても有意義な時間を過ごすことが出来た。もっと中国の事を知りたいと思えたし、もっと他の異文化への理解も深めたいと思えた訪中であった。

Ⅵ　地域国際Ｂ 個人レポート

2 年 堀越結衣

中国では私が持っていた、汚くて発展していないというイメージは覆され、発展が目覚ましく、すぐに日本は追い抜かれてしまうのではないかと感じる５日間の旅であった。それに加えて、中国の日本とは異なる文化に触れ、私自身学んだことが多くあった。

まず、20 日の夕食の後に中国の学生たちに大学の中を案内してもらった。北京師範大学の大学構内はとても広く、スーパーなどのお店がたくさんあったため、一つの街のようであった。さらに夜であるにもかかわらず学生で賑わっていて、新潟大学とは大きく異なる点ばかりだった。見るもの全てが見たことのないような光景だったため、パートナーの中国の学生やほかの学生に話を聞いたり、また自分の母国のことを互いに教えあい、中国の生活を知ることができた。

21 日についてであるが、この日は特に中国の文化や、風潮、教育の違いを感じた。北京師範大学珠海校での交流会においは、大学側のパソコンがうまく繋がらないまま定刻を迎えてしまうというトラブルがあり、さらに予定人数よりも 6、7 人ほど多くの中国の学生が参加することがその場でわかり、最後に渡すプレゼントが足りなくことがあった。しかし、私たちは、交流会の内容の順番を入れ替え、パソコンを使わない内容のものを先に行い、さらに持ってきていた予備でプレゼントをその場で作り、状況に合わせてベストを尽くし、結果、大きな失敗なく終わることができた。中国では会など、状況に合わせてベストを尽くすことをよしとすると事前に聞いていたので、中国的な会の回し方が少しできたのではないかと感じた。昼食では、私たちの班は飲茶に連れて行ってもらったが、そこでは、外食したら茶碗やお皿やコップをまずテーブルにあるお茶やお湯で洗うという、日本では体験したことない広東地方の文化に触れることができた。午後の下町観光では、英語教育についての違いを感じた。私の前を歩いていた中国の学生が、フランス人が営む編み物教室（ドリームキャッチャーなどが展示してあった）を見つけ私もそこに一緒に入っていくと、そこにいたフランス人の方と流暢な英語で会話をし始め、私はあまり理解することができず恥ずかしい思いをした。英語も勉強しているのかと中国の学生に聞くと、小学・中学・高校で勉強しただけだからあまり話せないと言っていた。しかし私は、小学校では英会話教室に通い、中学・高校と英語の学習はほかの教科に比べ頑張り、決して悪くはない成績をとってきたのに会話ができないのはもちろん、聞き取るのでさえ難しいところがあった。高校時代、英語の先生が中国では話すことを重視しているが、日本では読み書きを重視する教育をしていると言っていたが、コミュニケーションの根幹となる会話ができるようになりにくい教育はいかがなものかと感じた。思いもよらず中国の下町で日本と中国の英語教育の違いについて触れた。

22 日の珠海市観光では街のいたるところに大学の中国語の授業で習った文字や、見たこともないような景色があり心が奪われた。最初に行った邸宅では中国独特な昔の建築物を実際に見たり、中国のアイスや珠海に多くあるココナッツウォーターを飲んだりした。中国は日本とは違って常夏の気候であるので、このような施設にある売店に並ぶ食べ物も、ココナッツウォーターのような日本ではあまり見かけないものばかりだった。また、珠海名人蝋人形展も行われており、そこでは珠海の偉人たちや歴史を知った。その後のショッピングモールではイオンに行ったが、日本に売られているものとは大きく異なる商品が売られており身近なスーパーでも地域差が感じられた。

また 23 日の南澳実験学校での英語の授業参観においては、先に述べた英語教育の違いを目の当たりにした。小学校低学年に当たる子供達が、英語の時間に活発に手をあげて発表をしたがっていたり、先生と一緒になって授業を行っていた。もう 10 年以上のことではあるが私の小学校時代では、そもそも英語の授業が低学年の頃からは行われておらず、まして授業など先生の話をただ聞いているイメージだったため、衝撃を受けた。また、二つのグループに分けて発表をうまくできたかどうかを点数制にし、互いに高め合っていけるような工夫もなされていた。さらに１番違いを感じたのは、書くことを行っていなかった点である。会話に集中し、さらにその会話文も比較的短いものを繰り返し行うことで、小学校低学年の生徒たちでも頭に入れながら話すことができていた。私が経験してきた英語の授業というと、文法を覚えること・書くことが中心で、口に出すときもただ書いてあることを見ながら読んだり、長文を暗記して口に出したりというものだった。英語を会話に使うというよりは受験で使うた

めに学んでいるというようだった。私の周りにも、英語の成績はよかったが、会話はできないという人がたくさんいた。このような差がすでに小学校低学年の教育から現れているのだと感じた。その後の生徒に向けた日本の文化の授業では、質問が飛び交い、南澳学校の生徒にとっても異文化を知る良い機会になったのではないかと思う。私は、大変緊張したが、授業を行う大変さについて身を以て知った。午後の広州観光では、広州タワーをはじめ多くの高層ビルが立ち並ぶ様子を見た。その高さは、日本よりも高く地価もかなり高いということを教えてもらった。また地震が少ないからビルを高くできるという話も聞いた。発展途上国ということもあり、汚く古臭く工場ばかりのイメージを中国には抱いていたが、全くそのようなことはなく中国の発展が想像の何倍も、もしかしたら日本よりも進んでいることを風景からも感じられ少し恐ろしく感じた。夜、南澳実験学校の先生たちとの夕食を楽しんだ後に再び広州タワーを見に行った。夜の広州タワーはライトアップがされていて昼のものとはまた違った一面を見せており、とても綺麗だと感じると同時に、とても意外だと感じた。また、昼間のビルの風景や、広州タワーに綺麗なライトアップがされていることにも意外であると感じた私は、中国を無意識のうちに下に見ていたのだと自覚した。広州タワーの周りを歩いているときに先生がおっしゃっていた、「これからはこの発展が目覚ましい国と競いあい、時には手を取り合って協力していかなければならない」という言葉がとても印象に残った。

この 4 泊 5 日の滞在で一番よかったと思う点は、自分の目で見ることができたことである。この旅にいかなければ、中国が想像よりも発展していることを知ることはできなかったし、何より外国の文化を直接知ることもできなかった。そして海外の人と交流する楽しみや異文化を理解する難しさも味わえなかった。よりグローバルになっていく時代ではあるので、これからも異文化については考えていきたいと思った。また今まで何度か海外に旅行はしたが、今回の旅で初めて留学を本格的に考えるようになった。この講義で学んだことは今回で終わりではなく、次につなげて行きたいと考える。

Ⅶ　私にとっての発見

1 年　島田凛々子

9 月 19 日～24 日の 6 日間に渡る訪中団の旅の始まりは、無事中国へ行けるかということが一番の気がかりだった。珠海へ行くために、香港を経由するスケジュールとなっていたからだ。香港では逃亡犯条例の改正案に対するデモが大きくニュースで取り上げられている。両親には「今の香港の状況を知っているのか。危ない。」と心配された。それまでは、香港を経由することについて特に心配することはなかったが、デモの動画やニュースを調べていくにつれ、だんだんと不安を感じはじめた。自分は危ないとされている地に一瞬でも降り立つのだという実感が急に湧き、一気に怖くなった。不安を抱えたままの出発となった。

香港空港に着いた瞬間、自分の中で高揚感と緊張感が混ざり合っていた。周りの空気が違う、人が違う、聞こえてくる言語も違う。全てが異なっていた。自分たちは異国に来たのだと強く感じた。無事、珠海に到着したときは安心感に包まれた。

本レポートでは、集中講義「地域・国際交流 B」で学んだことについて、(1) 北京師範大学珠海分校、(2) 南澳実験学校、(3) 全体を通して、に分けて述べていく。

(1) 北京師範大学珠海分校

北京師範大学珠海分校では、文化の違いを知った。自分の通う新潟大学とは全く違う環境であり、驚きの連続だった。500 万平方メートルの土地に建設された大学はまるでひとつの街のようだった。あまりにも広いため、大学内を移動するにもある程度の時間がかかった。キャンパス内には商店街のように多くのお店が立ち並び、夜まで営業していた。物価も日本より安く、タピオカなどが日本円にして 250 円程度で買えてしまう程だった。

同じ漢字なのに意味が異なるものがあることも驚きだった。例えば、手紙=トイレットペーパー、勉強=無理、という意味であり、日本の常識がどんどん覆っていくのが面白かった。

ほとんどのお店ではキャッシュレス決済であった。レジではおつりがないため、現金支払いを断られることもしばしばあり、困った。日本では経験したことのないことだ。私は大学で「日本と外国人」という授業を取っていた。毎回 1 つのトピックについて、日本人と外国人が話し合うものだ。そこでキャッシュレス社

会がトピックになったことがあった。ドイツ人の男性が「日本はキャッシュレスが進んでおらず、とても不便だ。」と言っていたことが思い出された。その時はそれほど気にしてはいなかったが、中国に来てはじめて、日本はキャッシュレス社会において遅れているのだと実感した。これは国外に出なければわからないことだった。

印象に大きく残った会話がある。珠海分校の学生に「今までどこか海外に行ったことはあるのか。」と聞かれた。「台湾。」と答えたところ、一瞬間をおいて、なるほどと返された。不思議に思ったところ、「中国人にとっては、台湾は中国という認識だ。」と言われた。香港についても、「デモでは警察官が市民に指を噛み切られたという話も聞いている。私は、中国と香港が一つの国として仲良く平和になってほしい。」と言っていた。私は、社会主義の中国と民主主義の香港は、文化も違うし、全く違うところだという認識でいた。独立したいと立ち上がっているのなら、頑張ってほしいとも思っていた。私は第 3 者的視点から見ているのであって、当事者の国の人の視点から見るととそう思うのか…という発見があった。香港デモが話題になっている中でこうした生の意見を知ることができたというのは貴重な体験だった。

(2) 南澳実験学校（小学校）

広州市の南澳実験学校では、授業を見学することができた。英語の授業で驚いたのは、クラスの半分ずつを 2 つのチームに分けて、ポイントを競わせるスタイルにしていたことだ。相手チームにポイントが入るときはブーイングも起こっており、小さい子供にはすこし心が傷つくものになるのではないかという不安を感じた。しかし、こういった授業を小さい頃から重ねることで、心もタフになり、自分から積極的に発言していく強さを得ていくのだろうかと感じた。また、中国人の気質にもつながっているのかなと思った。英語の授業の終わりには、自分の意見を発言する機会が設けられていた。ここでまた驚いたのは、どうしてそう考えているのかの理由も話させていることだった。私はこれが一番教育で大切なのではないかと感じた。自分がなぜそう思ったのかを順序だてて相手に伝えることは、意外に難しい。しかし相手を納得させたり、自分自身がどう考えているかを理解したりするために最も大事なことだ。私たちは創生学部で今それを学んでいるが、その訓練が小学校の場で提供されているのはとても良いことだと思う。さらに、授業内での食べ残しの話題から、世界的な社会問題にまで発展させていた。授業のなかでこうしたことを織り交ぜていけば、社会問題の知識も自然と増えていくことになる。将来で必要になる力が詰まっていることに感動した。

数学の授業では、一億という数はどれくらいなのかという抽象的なことを、具体的なことで考えるという授業を行っていた。水の一滴のどれくらいの数が一億に当たるのかで考える班や、ペットボトル何本分に相当するかで考えている班、歴史を遡って年数で一億を数えている班もあった。いろんな方向から一億という数を考えることができるし、例えば水滴の数で考えた場合、環境問題へ意識が行き着くことになる、と先生はお話していた。たかが水一滴、されど水一滴。数学の授業で、水不足で困っている人々が世界にはいる、水を一滴でも大切にしようという意識が作られるのか、と感心した。私は今まで、そんな風に数学の授業を受けたことはなく、もし受けていたらもっと楽しく数を学べていただろうにと感じた。

授業見学の後、私たちは日本と中国の食文化についての授業を行った。その後に、南澳実験学校の先生方からフィードバックを頂くことができた。なぜ箸の長さが中国と日本で違うのかの理由が欲しかったということや、日本の伝統料理を日本人が頻繁に食べないのは、単に高価だからだけではないのでなはいか、といった指摘を受けた。もっと「なぜなのか」という疑問をもつことが大切なのだと感じた。そうすることで自国文化や他国文化に対する理解も深まり、より掘り下がった内容になるのだなと思った。

(3) 全体を通して

訪中する前と比べた一番の心境の変化は、言語を学びたいという意欲が高まったことだ。英語であれば多少の話の理解はできるが、中国語は全く分からないため、聞き取れもしなかった。自分の気持ちを自分で伝えることができないことがとてももどかしかった。現地で通訳をしてくれた五十嵐さんと周さんの、相手が言ったことを瞬時に理解して皆に伝えている姿は頼もしかった。言語を学び、現地の人と自分で話すことができるようになりたいと思った。

また、今回の訪中を実現させるのにあたって、先輩たちの苦労を目の当たりにした。交流会で何をするのかを 1 から考え、セリフ入りのスライド資料を日々作成していた。高速バス代やホテル代など予算も自分たちで考え、集金をして管理していた。現地では、観光中に個々でばらけてしまいがちなところを毎回統率し

てくれた。私は途中からこの講義に参加したため、自分が何をしたらよいかわからない状態にあった。もっと自分から、自分の役割を見つけていくべきだったと感じた。客観的に状況を判断して、多忙な先輩たちが考えきれないところ（例えば今回でいうお土産のこと等）を見つけ、能動的に動けば、自分の役割もはっきりして、自分も訪中団の一員なのだという意識がより高まったと思う。自分から動いていくことが何より大事なのだと学んだ。

今回の経験を通して、文化の違いだけでなく、政治的な発見をしたり、教育の仕方の違いを知ったりすることができた。チームとして動く大変さも改めて実感した。更に、自分が学びたいと思うことが少し見えるきっかけにもなった。これから、2 学期もこのエンジンがかかった気持ちを更に盛り上げて勉学に励んでいきたい。この訪中団の旅は、自分にとって本当に良い経験になった。

Ⅷ　日中文化の違い

1 年　溝井桜子

1. はじめに

訪中で私が意識していたのは「日本との違い」である。5 日間の中で、私はたくさんの中国料理を食べた。全てが初めて食べる味だった。また、円卓や宴会の様式・マナーなど、何もかもが日本と違っており、毎食が衝撃的であった。また、2 日目に私たちは珠海の歴史的な下町を観光し、日本との町並み・雰囲気の違いを感じた。2 日目・4 日目には珠海の北京師範大学・南澳実験学校も訪問し、その規模の大きさの違いや教育体制を知った。そこで今回は、「食」・「下町」・「学校」の日本との違いに着目する。

2.1「食」の違い

まず日本と違うのは、味付けである。私たちは、4 大料理のうち広東料理と四川料理を食べた。広東料理は、甘酸っぱい味付けのものが多く、四川料理は香辛料の効いた辛い料理が多かった。広東料理は比較的薄味で、日本人の口にも合う。また広東省は温暖な気候であり、海も近いため海外交流が活発で、食材が非常に豊富でバラエティに富んだ発達をしてきたそうだ。私たちが食べたエッグタルトも、海外交流の産物である。また食材も、鴨肉やイノシシ肉など、日本では珍しい食材がお店に行けば簡単に食べられる。次に四川料理である。四川は盆地で夏は温度や湿度が非常に高い。そのため保存がきくように唐辛子や香辛料を使った料理が発達した。また夏は暑く冬は寒い気候のため、夏は食欲増進、冬は体を温めるために辛い料理が食べられる。

次にテーブルの違いである。日本は長いテーブルでお座敷が多いが、中国の宴会では円卓が使われる。円卓は上に回し台が乗っており、各々が好きな料理を好きな時に取ることができるテーブルである。なぜ円卓が使われているのかというと、中国料理は本来大勢でわいわいにぎやかに食べるものであり、円卓を使うと、全員の顔が見え、コミュニケーションがとりやすいためである。また、円卓にはかどがないため、緊張感が和らぎ、言い争いのない和気あいあいとした宴会になるといわれている。しかし、円卓で食事をする際の注意点が、他の人が料理を取っているときに回し台を回してはならないということである。必ず周りを見て、食事をとり分けている人がいないか確認してから、回し台を回す。

最後に、様式・マナーの違いである。日本の宴会では、グラスが空になっているのを見たら、すぐに飲み物を注ぐ。しかし、中国では、好きな量を主に自分で注ぐ。また日本では最も立場の偉い方は立ち上がらず、他の人が自ら話しかけに行かなければならないが、中国では立場の偉い方が主体となり話しかけながら宴会を盛り上げる。そして日本に無いのが「干杯（カンペイ）」という文化である。これは、誰かが全体に向けて話をし、終わった時に「カンペイ！」と言って、白酒というアルコール度数の高いお酒を共に飲み干すというものである。この白酒の量によってその人の敬意が示される。また、中国ではお酒は誰かと飲むものという意識が強く、お酒を飲むときはかならず誰かに話しかけに行く。一人でちびちびと飲むものではないとされている。また一人で黙々と食べてしまうと、宴会が楽しくないのか、食事が口に合わないのかという印象を持たれてしまう。そのため中国の宴会は、ずっと立っている状態で、誰かと話をすることがメインになる。

2.2「下町」の違い

私たちが訪れた下町は、唐家湾古鎮の近くの町である。ここでは、観光地や繁華街ではなく、古き良き生活を見ることが出来た。日本の下町は、木造の家や瓦屋根、石畳といったイメージだ。その下町のイメージで行くと、中国の下町は全く異なるものである。中国の下町は、ほとんどが白いレンガ造りだ。中国は日本より地震が少ないため、一般的な家屋は耐震性を考慮せず、レンガ造りが多い。白いレンガ造りはヨーロッ

パを彷彿させる部分もあった。日本と違い様々な装飾がされており、国旗の飾りや壁のペイント、夜にはライトアップなど、とてもカラフルな町並みであった。また、日本との違いとして一戸建てが少なく、建物が連なるような形であった。

2.3「学校」の違い

私たちは北京師範大学珠海分校と、南澳実験学校を訪れた。北京師範大学は最近国立に変わった大学で、南澳実験学校は私立小学校である。まず私たちは北京師範大学を訪れた。驚いたのはその規模が大きいことである。北京師範大学珠海分校の生徒数は約 2 万人で、新潟大学の約２倍だ。敷地もとても広く、別の校舎に行くまでにとても時間がかかる。敷地内にスーパーも薬局もあり、敷地内が一つの町のようになっている。大学は山も所有しているそうだ。

南澳実験学校では、数学と英語の授業を見学した。数学の授業では、1 億の感覚を身に付ける授業が行われていた。1 億kgの米は、米俵何俵分なのかなど、1 億を身近なものに置き換える計算をしていた。英語の授業では、英語のアニメを観た後、2 人組のペアが前に出て、英語でそのアニメの芝居をするというものだった。そしてその芝居に対して他の生徒が評価をし、点数を付けるという仕組みだった。生徒同士で点数を付けあう制度は、日本ではなかなかないと思った。これにより批評の力や打たれ強さが身に付くのではと思う。また見学した授業はどちらも、生徒が自らアクティブに動いたり、思考しなければいけない授業だった。このような英語の表現力や数学的感覚を身に付けることができる授業は、ただひたすらに知識を詰め込むだけの授業が多い日本は取り入れていくべきだ。また驚いたのが、休み時間に行われる目のマッサージの時間と、おやつの時間である。授業後目の疲労を取るために目元をマッサージしたり、おやつを配りみんなで食べる時間があった。次の授業に向けてリフレッシュするために行われるそうだ。

3. 終わりに

日中の文化の違いがたくさんあり、学ぶことの多かった 5 日間であった。「食」に関しては特に宴会のマナーが日本とは全く違うため、1 から学ばなくてはならなかった。中国式宴会をよく知らずに参加したため、たくさん間違った行動をしてしまったとも思う。また、色々な日中の違いを述べたが、結論私が感じたのは、何もかも違うということである。日本と中国それぞれが違った気候や土地、歴史的背景などをもって発展してきたのだということを実感した。自分が日本の中で形成した価値観が取り払われたように思う。ごはんは一汁三菜、宴会テーブルは四角、下町は木造が多い、学校は小規模であるなど自分の凝り固まった世界観を変えることが出来た。

参考文献

Happy Life Style 株式会社. 中華料理は、なぜ円卓テーブルなのか。. Happy Life Style. Retrieved from https://happylifestyle.com/9033　(2019 年 10 月 10 日)

【補遺】連携機関の概要（『報告書』参照）

北京師範大学は、北京市海淀区にある中国教育部直属の国家重点大学で、教育学を主体に文理系学部を併せ持つ総合大学である。1902 年に創設された京師大学堂師範館を前身とし、100 年以上の歴史をもつ。中国の大学ランキングでは常にベスト 10 に入る超エリート大学とされ、教員養成系では中国トップの大学である。同大学は京師大学堂として創設されて以来、清朝、中華民国から一貫して重点投資対象とされ、毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦涛など新中国歴代の最高指導者すべてが視察を行ったという。珠海校は 2018 年度まで「北京師範大学珠海分校」という名称で、北京校と連携する独立の私立大学であった。2019 年 9 月スタートの新年度から、本校（北京校）に管轄される珠海校区（キャンパス）と改編され、国立大学となった。

他方、北京師範大学南澳実験学校（2002 年 9 月 1 日開校）は、中国奥園地産集団が投資し、北京師範大学が全面管理を行う、9 年一貫制教育を行う新しい形の私立学校である。広東省広州市番禺区にあるが、北京師範大学珠海分校の基礎教育（義務教育）改革の実験基地と位置づけられている。少人数クラス制度を導入し、教員のすべてが国の基準より高い教師資格及び学力レベルを有するとされる。

以　上